
わが家におわす観音サマ

光久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わが家におわす観音さま

【Nコード】

N1089D

【作者名】

光久

【あらすじ】

目の前に現れたのは、他ならぬ観音菩薩様だった！？ある日の夢から始まる橘忍夫の非日常。その世界、とくと御覧あれ。

第零審【ハジマリの世界】（前書き）

やや三ヶ月ぶり、光久です。

個人的にいろいろと立て込んでいて、やっと時間が取れるようになりました。

さて、以前の状態を知っている人は「一体どうなってんねん!？」
と
思っているでしょうが……すみません。此度私は『わが家におわす観音サマ』を一から書き換えようということにしました。

理由云々はここで書く理由も無いので割愛させていただきます。はい。

これからは非常にゆっくりとした更新になると思いますが、なにとぞお付き合いをお願いしますm（——）m。

第零番「ハジマリの世界」

気がつくと、自分は白い海の真ん中にいた。

……綺麗だな。

そんな感慨が湧く。足元で穏やかな波を立たせているそれは四方無限に広がっていて、更に言えば空も純白一色に尽きていた。その偉大な統一性に息を呑み、

懐かしい…？

まるで久しく自分の故郷にたどり着いた旅人のような、不思議な気持ちを抱く。

…いや、こんなことをしている暇は無い。と、軽く自分を叱咤する。

自分は、行かなければならないのだ。

何故か？と考えて、自分がその答えを持ち合わせていないことに気付いた。遠い昔、理由を知っていたはずだったのだが、今はすっかり忘れているみたいだ。ただそんなことはどうでもいい。むしろ、大切なのは『何処へ』だ。

決まっている。【 】のいる場所へだ。

そう思った矢先だった。

静謐な白の世界が、一瞬歪んだ。

来たか。

世界が鼓動する。これは、新たなる生命の息吹。まだ見ぬ大いなる存在の胎動だ。何故だかわからないが、そう感じた。

間もなく、【 が生まれる！

急がなければ。と足を動かそうとしたときだった。

！！

まるで地雷でも踏んだかのように、急に足元から何本もの鎖が飛び出す。雁字搦め^{がんじがら}に縛られ、すぐさま身動きが取れなくなる。

まずい、これ… イテエつつのお！！？」

ついきつく引つ張られたことに悲鳴を上げ、その『自分の生声』に驚いた。

「あああ？」

目から鱗が落ちたような……それでいて、頭がこんがらがったような感覚だ。つつか、どうして俺はこんなところにいるんだ？
なんなんだ、ここは？

ズゴン

そんな擬音が相応しい衝撃が、自分の足元に響く。いきなり何だ？
と思ったが、すぐに理解した。

「おっ、おい……」

体がどんどん沈んでいく。或いは、水面がどんどん上昇しているのか。真っ白なこの世界じゃどっちがどちかわかったもんじゃないが、膝下辺りにあった水面が、今股下にまで上がってきている事は

確かだ。

このままでは溺れると思っても、体に巻きついた鎖のせいで逃げられない。真っ白な水面はもう肩にまで到達しようとしていた。

「ったつ助け……っ！」

掴む藁も無く、助けの声を呼ぶにも周囲に人の姿は無い。

……いや、

「おい、あんた！」

いた。

目の前、大体十メートルかそれくらい先に、一人、素っ裸の少女の姿が。

格好云々はどうでもいい。もう顔を仰がなければ息ができない状態だからな。

「聞いて……！んのか！」

必死に助けを呼ぶ。しかし声は届かないまま、とうとう水位が俺の身長を超えた。体全体がその海に没する。口に入ったその味から、ああ、これ何か牛乳みてえだな。と、もはやどうでもいい事を考え

俺は思う。

このときの光景、そしてあの少女こそ、これから俺の身に次々と降りかかる『不幸』の原因なんじゃねえのか？と。

第一審【変容の兆し 1】（前書き）

あらゆる意味でぐったりしています。 o r z
詳しくは後書きにて .

第一審【変容の兆し 1】

目の前にあるその存在を目にして思う。

とうとう

始まった。

これまでの努力も虚しく散る。もはや逃れられない。あのバカ共の茶番からは。

そうならもう……

いや、

決して、そうさせてはならない。

まだどうにかなるかもしれない。まだ取り戻せるかもしれない。完璧に、路が閉ざされたわけではない。

ぜったいあきらめねえ！

遠い昔に言われた言葉を思い出しつつ、顔を上げる。

そうだ、諦めない。諦めてなるものか。

「きっと、助けるから」

その存在に自分は誓いを立てる。

そう、

……あの時の、代わりに。

第一審【変容の兆し 1】

妙に自分の体がふわふわと浮いているような気がした。かといってそこは水の中とは思えない。自分の体は規則正しく揺れていて、体の前面がほのかに暖かった。

このまま目を覚ましてしまうのが億劫なくらい心地がいい。ゆりかごとは違うが、まるで童心に帰る様な気持ちだった。

何かを忘れている気がする。それは一体何だったか。

心のどこかが訴えるような声に、もう少しだけと耳を背けてしまう。

あんな、何処ともわからない真っ白な世界に放り出されたんだ。もう少しくらい、良いだろ…？

そう、もう少しだけ

…

もにゅ。

意識がすっかり覚醒したのはその次の瞬間、両手に柔い感触をしたなにかに触れた時であった。規則正しかった揺れがピタリと止まる。心なしか、体中が酷く汗ばんだ。

………無意味な空白。その間三秒。

そして、良く聞き知った少女の声が耳に入った。

「……………忍夫^{しのぶ}？」

「はい……………あ？えっと」

無視していればよかったものの、何故その問いに答えてしまったのか。

気付いたときにはもう遅く、「起きていたのね……………」と、頭越しに声が聞こえる。

頭の中に言い訳が浮かんでは消える。そういえば、と今見ていた夢を何故か思い出したり、それよりも、と手の感触がいやに生々しく記憶に残っていて、まともな判断など出来るはずもない。つまりところ、完全無欠にパニック状態だった。

「忍夫、^{たちはなのぶ}橘忍夫」

自分のフルネームを呼ばれて、情けなくもこの場で逃げ出したくなる。

つらつらと罪状を告げる裁判官よろしく、そのままの体勢で言葉を紡ぐ少女。その状況を、たとえ目を瞑ったままでも間近で感じるのは、はつきり言って心臓に毒だった。

「『何時から起きてたか』なんて事は気にしない。つまり、私が忍夫を負ぶって運んでいたことには罪は無い。こればかりは私の責任だから。ただね……………」

「た、ただ……………」

「……………何時まで触ってたのよ？」

瞬間、忍夫は自分の尻に痛烈な一撃を食らった。

十　十　十

「……朝からずいぶんと鬱屈しているな。何かあったのか、忍夫？」

何故か感心したような声を聞き、忍夫はぐったりと机に寝かせていた顔をもち上げる。学校の、己の見慣れた黒板を背景としてそこにいたのは、首まできつちりと締まっている詰襟服に、常に無表情な丸坊主という、二世代ほど遅れたような格好をした男の顔。

「……………テツか」

「見ての通りの日立徹也だ。ひたち てつや……………何か不満でも？」

尊大な態度で仁王立ちする存在は見ているだけで腹が立ったが、今は殴る分の労力も惜しい。

再びぐったりと机に顔を落とす忍夫をひとしきり観察した徹也は、その原因に当りをつけ、それ（・・）のいる席をちらりと覗く。

忍夫の近所に住む同級生にして、唯一の女友達はその時、なんでもないような顔で、しかしどこか不穏な空気を醸し出しつつ、読書に耽っていた。

「……………また吉沢絡みか」

「“また”ってなんだ。そのイラつく笑みはなんだ」

ジロリと刺すような視線を徹也は避け、以外だと言わんばかりの口

調で喋りだした。

「ちょうど一週間前にもいざこざがあっただろうに。更に、それを考察すると、何だ忍夫、すっかり青春してるじゃないかと思えてしまふのだよ。彼女の容姿も中々故、余計にな」

言い切った後に笑みを更に深められ、忍夫は溜息で答えた。

勘弁してくれ。

吉沢祥子。
「よしむけい」

彼女は確かに同級生内では上玉の美少女と言ってもいい。艶のある黒髪に、整った顔立ちには、やはりそう言わしめるだけの魅力がある。そして物腰も落ち着いていて、優しい……という評価には、今朝いきなりアスファルトに落とされ、散々怒鳴られ、説教され、拳句の果てにそっぽ向いて完全無視という洗礼を受けた忍夫には、いささか反論を禁じ得ないが。

ただ、もとより吉沢と忍夫の関係は、そのような甘いものではなく、「家が近い」と言う接点を除けばほぼ赤の他人と言ってもいいというのが忍夫の見解である。

そんなことはともかく、

「それにしても、奇妙だな……」

どういうわけだ？と尋ねる徹也は一先ず置いておく。

どうして寝てたんだろう？

いざこざがあったその前を思い返してみると、不気味な要素が多い。

最後に記憶に残っていたのは、路上の景色。そこで眠気に襲われたことに始まり、決め手は“あの世界”。何処か神聖で無垢な白の空間。

何だったのか、あれは。

「……それほど落ち込んでいるのなら謝ればいいじゃないか」
「おいこら」

黙って考えに耽る姿を見て何を勘違いしたのか、喧嘩別れした生徒を受け持つ先生のように諭した徹也。
忍夫としては、あらゆる意味で不愉快である。

「大体なんで俺が悪いって解るんだ」
「ではあちらが悪いのか？」
「……そりゃ……」

考えるまでも無く、粗相をしでかしてしまった忍夫がほぼ全面的に悪い。
加えて、成り行きとは言え、あちらは忍夫を負ぶって運んでくれたのだ。

……そこを百歩譲って、こちらの言い分が無いわけでもないが、

「……わからんな。そもそも今朝何があったのだ？」

あの出来事を事細かに解説した上で、果たして『寝ぼけてました』はどこまで通じるのか。
返答に詰まった忍夫は、次の瞬間、例えば阿修羅のような殺気を感じた。

具体的には徹也が覗いた方角。左斜め前の三番目の席。……もつと言え、吉沢祥子本人から。

「……っ！」

喋るな。

最も恐れるべきは、忍夫以外の誰も気付かないタイミングでこちらを睨みつけたことだ。

口ほどに言うか、口以上に的確に物を言った吉沢の眼力を垣間見て、忍夫は本能から戦慄した。

その吉沢に背を向けた状態でいる徹也もまた気付くはずは無く、ただ何故かビビる忍夫を見てふと後ろを振り返った。

「……どうしたのだ？」

「あ、いや、何も……それと悪い。ちょっと言えない……かな。理由は」

途端に素面で本を読む吉沢に改めて恐怖し、忍夫は固く誓った。

絶対に、あの事実は隠し通そう。

何か使命めいたものを帯びた忍夫の顔を見て、考え込んだ徹也は、おもむろに口を開いた。

「吉沢に破廉恥でも働いたのか？」

眼力再来。

いや、今のは俺のせいじゃねえだろと内心慌てふためく忍夫を見て、徹也は何処か得心したような、それでいて申し訳無さそうな表情を

する。

「……了解した。これ以上詮索するのは止めておく」

「購買。ジュースとプリン」

「………すまない」

死ぬ前にせめてと慰謝料を提示して、忍夫は泣く泣く、三度机^{みたひ}に突つ伏した。

第一審「変容の兆し 1」（後書き）

前回投稿から日が経っているにもかかわらず、殆ど話が進んでいませんよ。はい。

この後の話もぜんぜん固まっていけない状態。
俺自身も色々立て込んでるし……

単刀直入に、誰か助けて（泣）

……とまあ泣き言はこのくらいにして（オイ
次回は部活の後輩登場。そしてタイトルのお方が出てきそうな気配
です……と銘打って自らを追い詰めつつ。

あ、もし良かったら感想とか送ってください。
では。

第二審「変容の兆し 2」（前書き）

6 / 25

中盤、忍夫と徹也の掛け合いをちと掘り下げてみました。あと後半も少し。

大筋は変わらない上にただむさいだけですけど、まあ覗いてやってください。

第二審【変容の兆し 2】

「準備は出来たかえ」

「万全です」

「よい……ふふ、まさか妾^{わらわ}が人間道に赴く日が来ようとは思っても
みなかったのう」

「随分楽しそうで」

「そうかや？まあ致し方あるまい。初めてじゃからな。残念なのは
之が観光ではないところじゃの」

「……『かんこう』……ですか？」

「あちこちを見て回って楽しむことじゃよ。いやはや、まったくも
って残念じゃ」

「そうですか……？……観音様^{かんのん}」

「その名前はとも と、どうやら開いたようじゃの。さあ行く
ぞ。『衛鬼^{えいき}』よ」

「御意に」

第二審【変容の兆し 2】

忍夫が住む町、久弥市にはただ一点、特筆すべきことがある。

即ち、寺の数。町一つとしては異常なほどの寺院密度は、聞くところによれば、奈良のそれをも凌ぐと言われている。戦国時代、かの織田信長に迫害された寺院の者たちが、この地に集って細々と暮らしていたとか何とか。ともあれ、特に興味がある人でもない限り、由来云々はどうでもいいことには変わらないわけで。

忍夫が通う県立久弥高等学校。その弓道場に隣接して建立されている大きな寺院からは、毎日、放課後辺りに物々しい御声が聞こえて

きた。

今日も一部員として最初に道場に足を踏み入れた忍夫は、他に誰もいないそのひと暇を、写経を聞き流すことで埋めていた。

他に部員には不評だそうだが、忍夫自身としてはそれでもなかなか良いものじゃないかと思う。門前の小僧ではないが、少し位なら言えるかも知れない。根暗みみたいな趣味なので誰にも言いはしないけれど。

そんな低調な、そして荘厳な経を聞いていると、

「　　っあゝまたですか。喧しすぎて吐き気すら湧きますね」

急に聞こえた独り言に、そこまで言うかと忍夫は思う。

「こちとら弓道に集中しなきゃならないのに、また飽きずに南無南無と……って、橘先輩じゃないですか」

「よくそこまで寺を悪し様に言えるな龍明寺^{りゅうめいじ}」

忍夫が振り向くと同時に、道場に入ってきたのは、やたらこちらを好戦的に見る　端的に、睨んでいる少女だった。肩まで掛からないショートのに、高校生と言うにはやや小柄な体軀。記憶が正しければ一年生　もちろん高校の　である。

龍明寺夏華^{りゅうめいじなつか}。弓道部の後輩、とだけ銘打つには些か個性がありすぎる少女は、苗字の通り、幾つもある寺院の一つ、『龍明寺』の娘である。

「だっかつらっ！『龍明寺』って呼ばないでくださいって何回言えはわかるんですかつ！」

そんなことを叫びながらオーバーアクションにずかずかと歩いてく

る龍明寺。眉の傾斜角がみるみる大きくなってくるのが、忍夫にも良く見えた。

「知るか。お前の“寺嫌い”も聞き飽きたわ」

「馬鹿ですかっ！先輩馬鹿なんですかっ！！」

「『先輩』と敬っておきながら馬鹿馬鹿連呼するのかお前は……いや、取り敢えず、いちいちじたばたり叫んだりはやめろ。近所迷惑だから」

或いは自分の家柄に対する、第二次性徴的反抗心だと忍夫は勝手に思っている。彼女が弓道部に入部して以来、周知のものとなつていられると思われるその“寺嫌い”。もっと端的に“巫女好き”は、いまでも、何故か彼を苛んでいた。

「やつぱり馬鹿です先輩。人がこんなにアピールしてるのに」

「ガキつばさをか」

「違いますっ。ほら、何か見違えた気がしません？」

いまいち龍明寺のテンションに追いつけていない忍夫は、くると回るその姿を目にして、取り敢えず気付いたことを口に出す。

「……………背え伸びた？」

「えっ？ホントですか…ってそうじゃないです！ほらっ！」

龍明寺が言いたいことには、既に気付いていた。歩き方、わめき方というわざとらしいアピール。気付かないわけがない。むしろ、定められている『弓胴着』という範囲を越えたその格好を、どう指摘すればいいか、判断しかねていたのが実情である。

上はまだいい。今日持参したものなのか、綺麗な白の胴着。

問題は、原色そのままの紅色を塗りたくった袴にあった。それらを

組み合わせると、成る程。何処か清純なイメージを与える儀式装束に変わる。人によっては興奮してしまうかもしれないその格好。

「ふふふ。やはり萌えますか」

アホかと口を挟む間もなく、少々頭の悪そうな笑みを、更に気持ちの悪い笑みへと変容させる。正直、女の子がしてはいけない類のそれだ。思わず引きつりそうになる顔をうまく隠しながら答える。

「『巫女服』……っばいな」

「さすが！ってか聞いてくださいよ！下だけで五千円もしたんですよコレ！？」

「……あゝ、果てしなくどうつでもいいわ。ついでに言つとくが全く萌えん」

「嘔吐きです先輩！巫女と言えば『梓弓』！弓と言えば弓道！！コレ以上なく巫女と関わりがあるこの武道に巫女萌えがない訳ないじゃないですかっ！！！！」

「梓弓は知ってますよね？」と続いて理解不能な単語主体の演説が続く。話題が自分の領域になった途端このはしやぎ様。この辺り、彼女がどんな心持で入部したのかが伺える。というかさも部の共通認識のように言わないでほしい。唯でさえ、彼女の大々的『弓道部は巫女萌え』発言で周囲から孤立気味となっているのに。

勘弁してくれ。

本日二度目のその台詞は、一度目のそれよりも疲労の溜まったものになった。

呆然と受け答えしていて尚、弱っていくのが自覚できる。ただでさえ、吉沢との朝の不幸。或いはしっぺ返しを引きずっている忍夫に

とつて、今の状況は、さしずめ泣き面に蜂の大群だった。

しかし、苦痛は長くは続かない。入り口から他の部員らしき足音が聞こえてきて、龍明寺の巫女談義はひとまずお開きとなった。

やれやれ、と開放感に浸り、更衣室へと足を伸ばした。

そんな時、

「……気を付けて下さいね」

直後に放たれた、対象不明の忠告に、忍夫は顔をしかめた。ふと、朝の夢が頭に去来したが、

いや、深く考えすぎだろ。

たぶん挨拶の類だと考えを改めて、なおざりに手を振って返した。

十　十　十

通学路に五つも寺院が建っているのは、世界広しといえど、そうそうは無い。一年の高校生活を過ごしてきた忍夫は、今日もそんな他愛もないことを考えながら下校していた。

青から赤へのグラデーションが空に展開し始めた頃合い。西日に差された閑散と道路の右手には、小さな空き地と共に、『観照寺』と言う名前の石碑、そして申し訳程度の仏壇がある。通学路にほぼ等間隔で建てられた中の、学校側から二番目の寺。徒歩通学の忍夫は、その側を横目で通り過ぎた。

「……どーしよっかな……」

「どうした？」

そう言つて頭を抱えると、今まで失念していた声が、左から聞こえた。

「……なんだテツか」

「校門からずっと居た友人を『なんだ』とは酷いな」

「いや、お前つてビジュアル的には誰よりも存在感があるくせに、ふと気がつけばいるみたいな所があるからなあ」

「……所々の棘のある発言には、この際目をつぶらせて貰おう」
「そりゃ助かる」

学区の関係で中学校からの知り合いだが、忍夫と徹也の家は程々近い。お互い部活の身であることもあつて、時間が合えば二人で帰ったりする。今日も偶然、校門でばったり会つたことを、忍夫は今更ながらに思い出した。

そんな徹也は、場を仕切りなおす意味を込めて咳払いをする。彼の癖であるその仕草に、忍夫はいやな顔を隠さずに表した。

「では、今しがたの発言について問い詰めさせてもらおうか」

「めんどい」

「そう言つな。いや、どう言おうが俺の姿勢は変わらないな……わかるだろ？ さあ観念しろ」

ただ悩みを打ち明けるかどうかという話なのに、なんで『観念しろ』なんて台詞が出てくるのか。

「……わかつたよ」

正直、作りたくない。そう考えているのは、今夜の晩飯についてだ

った。

責任は、不定期な仕事に就いている母親にある……と忍夫は密かに思っている。

「色々あつてな。週に数回、自炊しなければならんだよ」

本人としてはずいぶん億劫なものだった。母親の、「作らなきゃシメる」の勅令さえなければ、たとえ晩飯を抜くことになっても作らないだろう。

「いやまあ、材料は残っているか」とか、今日は何を作ろうかなとか。んな前向きな事も考えてはいるんだけどさ……」

それでも、たかが自分の為にと、面倒臭く思ってしまうのも仕方のない事ではないか。

……そんな考えをする自分はきっと、間違っているのだろうか。そう自分の中で結論づけていると、徹也は、

「ふむ……つまり、楽しくないわけだな。料理が」

そんな事を聞いてきた。思わず虚を突かれて、目を丸くしてしまう。

「楽しい……？なんで」

「俺も、家の事情で偶に自炊することもあるが、やってて思いのほか楽しいと思うのだな。どうすれば効率良く出来るか、どういう切り方をすれば食材の旨味が出るのか、とな他には」

さすがにそこまでいくわけが無いと思っている忍夫だが、どうにも、旗色が悪そうだった。

「そんなもんか？」

「弓道は楽しくないのか？」

「え？特に」

「違うな。そんなもんじゃない」

段々徹也が熱くなっている気がする。飛び飛びの話題に翻弄されそうだ。

「お前を見ているとただ日常を淡々と過ごしているようにしか思えなくてな」

「……………」

そう思わないでもない。忍夫はそんな顔をする。しかし、

「中高関わらず、二年生は中だるみ。誰だって同じじゃねえか」

「だから、」

「お前は違うかもしれないさ。テストでは順位一桁。部活の剣道では期待のホープ。まったくすげえやつだよお前」

そんなつもりでもないのに、自然を声を荒げてしまふ。或いは、溜まっている何かを吐き出すように。

「でもそんなあんただからそう思っちゃまうんじゃないの？それに引き換え…なんて言われそうだな。全」

「忍夫」

それ以上の独白を徹夜は手で制す。その眼差しは、愁いを帯びていた。

「もしかしたら俺が言い過ぎたのかもしれないな。謝る。ただ、言

いたかったのはそんなことではない。……高校生らしくないのだ。
いつからだったかお前は心に、」

そこで言葉を切ると決まりが悪そうな顔をした。
遠くで子供の笑い声が聞こえる。心に？と聞き返そうとしたところで、

「いや、すまない。やはり今は忘れてくれ」

「……こつちも悪かった。どうにも頭がぼーっとして」

そうか、と小さく呟いて、そそくさと自分の家の方角へと向かう徹也。忍夫は少し遣る瀬無く、その背中を見る。
肩越しからは……

「ふふ、やはり忍夫。吉沢と仲直りしろよ」

「なっ！」

爆弾を投げつけられた気がした。

「その諸症状はきつと吉沢が原因だろうな。やはりお前らは」

「いっぺん殴らせるこのくそばか」

「それこそ、仲直りしてからやるんだな。そう簡単にはやらせないが」

余計なお世話だと毒づきながら坊主頭を忍夫は見送った。それから徹也が路地の角を曲がり、完全に見えなくなったところで、心なし緩んでしまっている頭を拳骨で小突きながら、再び帰路につく。

「楽しい、ねえ」

それほど時間が経っていないと思ったが、空は既に星の瞬きを映し始めている。

思った事があつただろうか。時々作る料理に。或いは、日常に。三番目。『面徳寺』の門を過ぎても、思い浮かぶ事はなかった。

「そんなこと……どうでも……？」

異変を感じたのはその時だった。

「……なんだ？」

ざっと周囲を見渡す。真っ赤に染まった光景には、特に不思議なところは何もない。

いや、

「……っ！」

異変は、足下からだった。

何故かは全く見当が付かない。アスファルトが、まるで蜃気楼がかったように、歪んだ。

まずい。

本能で悟った忍夫は、慌ててその場から離れた。変化は続く。歪んだ地面は、やがて黒い穴となる。気味の悪い空気がそこから漏れ出ているような気がした。

「お、おいおい……誰の悪戯だよコリヤ」

冗談交じりのその声も、震えが入ってうまく言えない。そして次の瞬間、

黒い穴から手が這い出てきた。

「うつ……！！！」

次に頭が。

そして顔が。

肩が。

身体が。

足が。

化け物だ。

その全貌を見るや否や、忍夫は反転する。

逃げようと思った。アレはまずい。この状態じゃどうしようもない。しかし、もう遅かった。

「んなつ！」

同じような穴が、忍夫を挟んで十以上。そのどれもから、今見たような腕が飛び出し始めている。
逃げ場は。

「……つくそつ！」

忍夫は『面徳寺』に向かって走り出す。もはやそこにしか、道はなかった。

門をくぐって、忍夫は本堂の裏へと逃げ込んだ。どこかに繋がっているかも知れない。と思ったが、出入り口の門以外は、全て壁に囲まれていた。幸か不幸か、忍夫以外の人間は一人も居ない。

一縷の望みをかけ、角から門を伺う。そして後悔した。

龍明寺よりも小さい、幼稚園児のような背。ただ、体中が痩せ細り、目をギラつかせ、腐ったような唇からは牙が見え隠れして、枯れきった喉から出たような呻き声を上げる。そんな化け物が、見えるだけでも二十体以上。全員が、忍夫の逃げ込んだ面徳寺に入ろうとしていた。

間違いなく、自分を狙っている。そう悟った。

「なんなんだ……」

なんなんだあれは！

そう叫びたい気持ちを抑え、必死に身を隠す。

草を掻き分ける足音が段々と近づいてくる。嫌な汗が止まらない。

鼓動が痛い程に響いてきた。

走馬灯。これがそう呼ぶのかもしれない。ただ、目を瞑ったその先に見えたのは、高校の、それどころか中学の頃の自分でもなく、今朝見たあの夢だった。

白い空、白い海、その先に見えた素っ裸の少女、そして鎖に絡めとられ沈み行く自分。

どうしてそんな景色が、今

「『如来』」

突如、少女の声と共に風が舞う。舞う中で、あの化け物の枯れた叫び声。或いはそれは、悲鳴を思わせた。

「こちらに出てきてた途端遭遇とは、何とも萎えることじゃのう」

暫く、その声に何の反応も返す事が出来なかった。

「しかし『餓鬼』に襲われるとは難儀じゃな人間……ぬ、どうやら標的を妾に变えたようじゃ。どれ、一つ相手をしてやらぬか……衛鬼よ」

「御意に」

再び、化け物達の悲鳴。思わず本堂から門を覗く。そこには、一匹、また一匹と蹴散らされているあの化け物と、白髪の 恐らく自分と同じくらいの背格好をした青年の人影。

「御主、何時まで隠れているつもりじゃ」

そしてもう一人、手前の人影は、ゆっくり忍夫に振り返る。
そこには、

「……はい？」

「……なんじゃその顔は」

良くて十四程。背ほどの黒髪を棚引かせ、袈裟をその身にまとった少女が佇んでいた。

第二審「変容の兆し 2」（後書き）

無い頭しぼってようやく生み出した第二審。ええ、存分に叩いちゃって結構ですよ？未だに一人称なのか三人称なのかわかんないところとか。自分でも悩んでるんですから。ハイ。

ってのはまた今度にして、

コレでやっと軌道に乗り始めました。タイトルの娘も出てきたし。話を考える側もコレで一安心ってな訳でして。いやいや此処まで一体何ヶ月かかったんだって思うと、ね。

甘口辛口関わらず、批評は私の滋養となります。鯉に餌をやる気持ちで、どうぞ書いてやってください。
では。

第三審【崩れる認識 1】

ただ、息を呑む事しかできない。

化け物が出てきて、そして襲われた。

今まで感じた事のない、本当の恐怖感を知った。

そして、そんな状況から自分を救ったのは、まるで鬼のような雰囲気を持った白髪の青年と、年端もいかない しかしただ者とは思

えない、袈裟をまとった少女。

非現実的。己の認識に修復不可能な輝ひびを入れたその光景。

それを目の当たりにして、ふと、忍夫は思った。

龍明寺が呟いた、単なる挨拶だったはずの、

『……気を付けてくださいね』

あの言葉は、今のこれを予知しての物だったのではないかと。

第三審【崩れる認識 1】

「衛鬼」

呼びかけられた白髪の青年は、襲いかかってくる化け物を小太刀で切り裂きつつ、周囲をざっと見回した。

足下で倒れ、そして直ぐに霧散した化け物。今居るその場所は、悠然と立っている少女と、本堂に隠れている忍夫。二人と、化け物の間。

「【餓鬼】が三十三体。奥の【澱み】の規模から鑑みても、十分対

応できる数です」

まるで、少女の意志を汲み取ったように淡々と報告し、

「殲滅も可能ですが？」

二人に飛びかかるうとする化け物を一閃にて断ち切り、そう尋ねた。

「よい。耐えるだけに留めよ」

それに少女は、古めかしい言葉を使いながら、自身を顕にするような笑みを浮かべて命令する。

「……少々、考えがある 補助は要らぬな？」

「不要です」

「阿呆。そういう時は『大丈夫です』と言つのが常じゃ」

「……、大丈夫です」

ちらりと青年は後ろを振り向く。頬を膨らませるといふなんとも稚拙な表現で怒るその顔を見て 何故か脂汗を流しながら それ以上何も聞かず、衛鬼は化け物の群れへの対応に専念し始めた。斬つてはその化け物を消滅させ、どうあつても一定のラインを超えないように。

そこまで見た少女もまた、振り返る。そこに居たほうの男は、どうにか本堂から出てきたものの、それっきり動かない。

怯えている。そう認識した少女から見れば、男は随分と普通の青年だった。地味な服装（とは言っても制服である）。特徴が見受けられず、目を離せば一時間としないうちに忘れ去られてしまいそうな顔。ついでにこの体たらく。故にその存在、どれだけの価値も無いはずなのに。

どうして。そんな風に一瞬顔をしかめ、そして、

「さて　とおっ！」

「ほげっ！」

「地蔵でもあるまいに、呆けていても邪魔だなけの間抜けめが。菩薩面を貸す。そのまま去ぬが良い」

遠慮とかそういう感情を一切排除した、辛辣千万な言葉を、鋭い蹴りと共に放った。

何だおまえは！？

向こう脛という弱点を突かれてその場に蹲うずくまった忍夫は、呻きながらそう言いたかったのだろう。恐怖故か、声が出ずに口しか動いていない。

どうにか忍夫は顔だけでも上げる。視界の端で青年が化け物相手に大立ち回りしている。その少女は、やはり中学生一年生ぐらいの背格好をしていた。背中にまで伸ばした、漆のような黒髪。明後日の方向を眺めている目もまた、綺麗な黒だ。彼女が纏っている服装も黒。或いは喪服かと思ってしまうけれど、それにしては静かな雰囲気が無い。むしろ『支配色』。あらゆる物をひれ伏せさせる黒。そんな少女は、自らの袖をまさぐっている。

「……………」

警戒する忍夫。しかし始めこそ蹴られたものの、今現在も敵意はない。そう思った忍夫は、助かったのか？と少し気を緩める。

さて、忍夫の仕草に完全無視という態度を見せていた少女は、『これで…』などと呟いて、袖口から一枚の面を取り出した。

「お、おまえら一体　」

「寂静　」

忍が話しかけたのに無視。とかく、少女がその面に手をかざし、そう唱えた。

清浄さを思わせる音と共に、面は蒼く光る。まるで魔法を見ているようだ。

「なっ、なんだそれ!？」

「これで良いじゃろ。ほれ。それをしっかり持っておるがよい」

「え、あつゝと。これで何を」

「くれぐれも落とさぬようにな。死ぬぞ」

やはり無視。そんな事を言いながら面を放り投げられ、忍夫はおっかなびつくり受け取った後、耳に入った言葉に戦慄した。そして目線を落とす。

…その面は、いわゆる『仏様』の御尊顔とでも言うべきか。中学校の修学旅行が脳裏に過^よぎる。その時圧倒的な大きさを誇っていた顔が今、生々しいまでに手元で表現されていた。

「キモ」

一瞬恐怖を忘れて顔を歪めてしまうほどのインパクトである。御利益ぐらいは享受できそうではあるが。

「……じゃなくて、お前らは一体誰」

「衛鬼!」

どこまでも忍夫を無視しまくって、用意は着々と進む。少しいじけてやりたい衝動に駆られた。

「邪魔だ」

青年は、最後に一閃、周囲の化け物を軒並み薙ぎ払ってから、少女の元に走り寄った。
そして跪く青年。そして、仁王立ちする少女。さながら姫君と守衛の騎士である。

「…つか話を聞け」

「こやつを逃がす。塀の向こうへ放り投げよ」

そんな姫君は、とことん自分を無視して最後に淡々とそう命じた。

「……は？」

いよいよ落ち込もうと思って、それから彼女の言葉を理解する。
啞然呆然。或いは思考のフリーズ状態。

「御意に」

「御意に？つて違うっ！今何だった！？放り投げ？ちよっ、やめ…
ぬわあああああ」

返事をする青年。戸惑う忍夫。逃げた方が得策と気付いたのも遅く、襟首を掴まれた感触。次の瞬間、自分を無視した少女、白髪の青年そして化け物。全てが逆さに映っていた。

要するに、忍夫は宣言どおりに投げ飛ばされていたわけで。
前後のみならず、上下左右までもが不覚。五感が麻痺しかける二、七秒の滞空時間の後、山なりに飛んでいった忍夫は化け物と遭遇したアスファルトに着地した。

「あああああぐをつ！だつ！！がへつ！！！」

否、激突した。

当然の事ながら、スタント経験なぞ皆無。ましてやワイヤー無しのカチンコアクションに忍夫が対応できるはずはない。結局、二回三回と地面に叩き付けられた忍夫がようやく止まったときには、満身創痍な状態でアスファルトに伏せていた。

「死んだ…俺死んだ…完膚無きまでに俺死んだ…っ！！っつか何だあいつ！？いきなり投げるか普通？しかも頭からブツブツッ……………」

ただただ、情けない姿である。

瀕死でありながら、何やら呪詛のように呟いていると、その近くにいた化け物が、忍夫に向かっておもむろに爪を振り上げる。

「くっそ弓矢さえありや遠距離からあいつら射抜いてうわあああああつつつつ！」

振り向き、そこに認識して　しかし遅い。

声帯しかまともに機能しない。逃げる事もままならなかった忍夫は、恐怖に目を閉じ、その爪を一身に受け

「つつつつ……………」

ない。

「何をオロオロしておる！とつとと蹴散らして逃げんかこの間抜け！！！」

無茶言うな。

無事にそう思えた事に疑問を持って恐る恐る目を見開くと、そこには、まるで透明な何かに乗りかかっているような、何とも言い難い格好をした化け物の姿が。

「……………は？」

あんぐりと口をあけたまま声帯を震わす。ただ、ぐずぐずしている暇はない。

気が付けば、忍夫は一人、化け物の群れの真ん中にいた。

いわば隠れる前に逆戻り。いや、逃げ道や怪我のことを考えれば、寧ろそれ以下の状況ではないか。

「う、うわああああ！」

「一々叫ぶでない耳障りな その【菩薩面】を持つ限り、餓鬼共は御主に触れられぬから早く逃げると言うておる！」

『逃げる』と言われて逃げられるような状況ではない。既に頭の中がパニックに陥っている忍夫にとって、少女の言葉は、忍夫が見る“化け物の群”という光景にかき消されていた。

それを知ってか知らずか、少女は舌を打つ。

こうなれば、忍夫の頭に訴える方法は一つである。

それは、

「…いい加減にせぬと、今度は三途の川の向こうにまで投げ飛ばさせてやるっぞ！！」

少女の叫びに、一瞬だけ、化け物までもが静まる。それはまた、忍

夫に、確かに届くだけの力があつた。
ずばりは脅迫。三途の川。

「よし、行け衛」

「来んなああああああ」

ついさっきまで瀕死だったのに、いやだからこそ、忍夫は化け物を蹴散らしながら、走り去っていった。

まさに火事場の何とやら。人間その気になれば、である。

「ふん、やれば出来るではないか、あ奴め」

そんな断末魔を堀越しに聞き届けた少女は何かを含めた黒い笑みで頷いた。

すなわち『第一段階終了』、と。

「観音様」

「だからその呼び方は……と、」

衛鬼が忍夫に構っていたところからだろう。今や五十を超える化け物【餓鬼^{がき}】が、二人を取り囲んでいた。

「……ああ、未だ此奴らが残っておったの」

「六十二体……【澱み】が広がっている？」

少女は呆れ、衛鬼は異常な事態に首を傾げる。未だ純粹、或いは無知な従者に向かつて、少女は口を開く。

「稀にあるのじゃよ。幾つかの要因が重なり、澱みを広げるとい

…な」

そして低く小さく呟く。

面倒にならねばよいが、

聞き取れず首を傾げた衛鬼をよそに、しかし直ぐに調子を元に戻すと、

「まあ今はどうでもよい」

少女は仮面を構え、衛鬼もそれに応じて小太刀を逆手に持つ。二人が放つただならぬ殺気に、攻撃の意志として殺気を返す餓鬼達。二対六十二。言うまでもなく、数においては圧倒的に不利な状況。それでも、

「衛鬼、瞬殺して奴を追うぞ」

「『奴』……とは、」

「勿論、」

群れが一斉に二人に飛びかかってさえ、

「あの間抜けじゃよ」

小さな少女は、微笑みを決して崩さなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1089d/>

わが家におわす観音サマ

2010年10月20日19時54分発行